

東大の良問

10に学ぶ

英語の思考法

青戸一之

Approaches behind 10 Class
Questions from the University of

(1997年東大入試問題より) ※解答例は裏側に

Q
この4コマ漫画のストーリー
を英語で考えてください



ハイレベルな英語力とワンランク上の発想力が
試される東大英語を1冊で味わい尽くす!

東大の良問10に学ぶ英語の思考法

青戸一之

星海社

376



SEIKAISHA
SHINSHO

東大英語ほど面白い問題はない――。

みなさんは大学入試の英語と聞くと、どんなイメージが浮かびますか？ 単語と文法をひたすら覚えていないとわからない、退屈な長文問題を解かされる。どこか面倒くさいよ
うな、そんな印象の人も多いのではないのでしょうか。

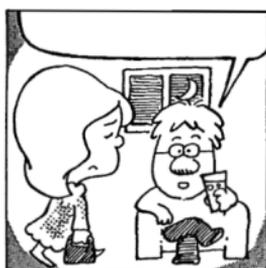
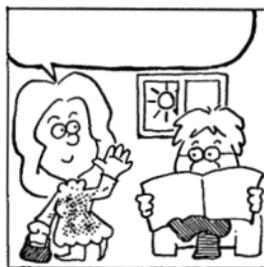
でも、東大英語は違います。私は塾講師や家庭教師として長年さまざまな入試問題を見てきましたが、東大の問題ほど多様性が豊かで、なおかつ深みと解きごたえを両立させているものを知りません。一般的な大学入試の英語は、長文読解と英作文、あるいは長文と文法・語彙ごいの問題で構成されていることがほとんどです。対照的に、東大入試の英語の問題は①要約、②文補充、③自由英作文、④和文英訳、⑤リスニング、⑥文法、⑦英文和訳、⑧長文読解という8つのジャンルに分かれており、非常にバラエティに富んだ構成になっ

ているのです。

問題の種類だけでなく、その中身もまた多彩です。代表的なのが英作文で、たとえば「私たちは言語を操っているのか。それとも、操られているのか。あなたの意見を60〜80語の英語で述べよ。」といった哲学的なものもあれば、下のような4コマ漫画の展開を考えて英語で説明させる問題もありました（1997年2（A）の英作文）。

他にも、単に段落ごとの要点をつなぎ合わせるだけでは答えにならない要約問題や、内容の面白さに思わず聞き入ってしまいそうになるリスニング問題など、他の大学入試では類を見ないようなものがたくさんあります。文法や単語の知識はもちろん重要ですが、それらを身につけただけでは攻略できないほど、多様な形式と問いの奥深さに彩られているのです。

Q 次の4コマ漫画がつじつまの合った話になるように2、3、4コマ目の展開を考え、各コマに対応する説明文をそれぞれ1文の英語で書け。



ただ、東大英語はなにも英検1級レベルのような難しい語彙や、マニアックな文法知識を問うているわけではありません。あくまで文科省が定めている学習指導要領を逸脱しない範囲で作られています。それでも難しさと面白さと奥深さが共存しているのは、出題者が知恵を絞りに絞って問題を洗練せんれんさせ、教科書レベルの内容といえども深い理解がなければ解けないようにしているからです。

自己紹介が遅れましたが、私は中高生向けの受験指導歴が今年で19年目を迎える、プロ講師の青戸あおと一之かずゆきと申します。私は30歳のときに自身の東大受験を通じて、はじめて本格的に東大英語の面白さに触れるようになりました。現在は駿台予備学校お茶の水校3号館と株式会社カルペ・ディエムが協同して開催している「東大特化学習支援コース」にて、カルペ・ディエムの講師として既卒生向けに東大英語の攻略法の指導も行っています。

仕事を通じて東大入試の研究を進めるうちに、英語の本質的な理解を問う問題のつくりの精巧さと、どこか遊び心も感じさせるような出題者の深い意図にどんどん魅了めいれうされていき、この面白さをもっと多くの人に知ってもらいたいと思うようになりました。そして幸運にも本書を執筆する機会に恵まれ、今こうしてみなさんの手に取っていただいています。

本書を企画していただいた西岡尙誠さん、編集を担当していただいた星海社の片倉直弥さん、そして今読んでいただいているみなさんには、この場を借りて感謝申し上げます。

本書の構成

本書では東大英語の良問10題を、1章ずつに分けて解説していきます。第1〜8章では現行の東大入試の英語の構成に合わせて、第1章が要約、第2章が文補充……といった順でそれぞれの問題を扱います。順番に読んでいくと、英文をマクロの視点からミクロの視点で捉えるように、問題の内容が徐々に変化していく様子がわかるでしょう。また、東大英語では読解だけでなく、リスニングや英作文といった幅広い技能が試されること、そしてその多様な問題に素早く、かつ臨機応変に対応する力まで求められることもわかるでしょう。スピーキングを除けば、「英語の総合的な運用能力を測る試験としては完成形ではないか」と思われるくらい、バリエーションに富んだ構成になっています。

そして第9・10章では、過去に1度だけ出題された珍しい形式の問題を紹介します。これらの章では、東大側が求める学生像を体現するかのように、出題者も常に新しい可能性を探り、作問の限界に挑んでいることが伝わると思います。

それぞれの章は「講義編」と「演習編」に分かれており、講義編では実際の問題の紹介と、東大がその問題を通じてどんな力を問うているか、その力が身につくことにどんな意義があるのかなど、出題意図についての考察を行います。そして演習編では、どのような思考プロセスを経て答えにたどりつくのかを、初めて東大英語に触れる方でもわかるように丁寧に解説しながら解答例を示します。英語が苦手な方向けに問題文の日本語訳も載せて、しっかりと中身を味わいながら英語の思考法が身につけられるようにしています。

そもそも英語は、主語や動詞をはじめとして語順に明確な原則があり、論理の流れを重視する言語です。日本語と英語の構造や考え方の違いを理解することは、ものごとをより多角的に、かつ論理的に捉え、相手に自分のメッセージを伝える力や表現力を養うことにもつながるでしょう。そして、東大英語はそれをよく教えてくれる良問ばかりです。本書は単なる試験対策ではなく、東大英語を教養としても楽しめる、新しいタイプの解説本になっています。その奥深さを楽しみながら、英語の思考法の世界を一緒に探求していきましょう。

第1章 要約 東大に入る資格があるかどうかを問う 11

第2章 文補充 よりロジカルに前後の文脈を追う 29

第3章 自由英作文 発想力と表現力が試される 53

第4章 和文英訳 日本語の機微を英語で表現する 69

第5章 リスニング 先読みして音声を待ち構える 83

第 6 章

文法

文脈と文法の両面から考える

109

第 7 章

英文和訳

文構造・語彙・文脈のすべてを織り込む

123

第 8 章

長文読解

マクロとミクロ両方の視点で読む

145

第 9 章

文補充

別角度から文脈の正確な把握を問う

187

第 10 章

リスニング

日本語と英語の差異を瞬時につかむ

211

第 1 章

要約

東大に入る
資格があるか
どうかを問う

講義編

東大英語の「顔」とも言える要約問題

東大英語の入試問題のページをめくると、最初に受験生を「ようこそいらっしやい」とお出迎えしてくれるのが1(A)の要約問題です。年度によって多少の違いはありますが、基本的には長文全体の内容を60〜100字程度の指定された字数でまとめさせる形式になっています。出題される文章のジャンルは政治・経済・社会問題から哲学・芸術論まで幅広く、スタンダードな「序論・本論・結論」という構成になっているものばかりとは限らないので、なかなか一筋縄ではいきません。また、仮に文章の要点がつかめていても、それをそのまま訳してつなげただけでは解答の文字数が大きくオーバーしてしまうようになっていきます。筆者の主張を的確に読み取り、さらにその要点を論理的に再構成して簡潔にまとめて、やっと指定字数内に収まるように設計されているのです。言葉づかいや論理構成に一切ムダのない、高度な表現力まで求められるところが東大らしさと言えるでしょう。

そして、この要約問題はなんと過去60年以上にもわたってほぼ毎年出題されています。これはまるで「要約ができなければ東大に入る資格はない」という、大学側からのメッセー
ジのように感じられます。

さて、そんな東大英語らしさを象徴する要約問題ですが、本書で紹介するのは2001
年に出題された、一風変わったエッセイ調の短い文章です。

次の英文の内容を30〜40字の日本語に要約せよ。句読点も字数に含める。

The other day I happened to become aware for the first time that my electric toothbrush
was white with two upright blue stripes of rubber to hold the handle. The button to turn
the toothbrush on and off was made of the same blue rubber. There was even a matching
blue section of the brush itself, and a colored ring of rubber at the base of the brush handle.
This was a far more carefully thought-out design than I had ever imagined. The same was
true of my plastic throwaway razor with its graceful bend that made it seem as if the head
was eagerly reaching out to do its job. If either my toothbrush or razor had been mounted

on a base, it might well have qualified as a sculpture. Had they been presented as works of art, I would have seen something more than an object, something deeper in the way forms can take on a life of their own and create enduring values. "Rightly viewed," Thomas Carlyle wrote in his book *Sartor Resartus*, "no meanest object is insignificant; all objects are as windows, through which the philosophic eye looks into Infinitude itself."

(日本語訳)

先日ふと私は、自分の電動歯ブラシが白地で2本の青いゴムの縦線があって、持ち手をしっかり握れるようになっていて初めて気づいた。歯ブラシの電源のボタンも、同じ青いゴムでできていた。ブラシ自体にも相応の青い部分があり、ブラシの持ち手の底部には色付きの輪状のゴムがあった。それまで思いもよらなかったほど、極めて入念に考え抜かれたデザインだったのである。全く同じことが当てはまるのが、私が今使っているプラスチック製の使い捨てカミソリであって、優雅に身をかがめ、まるで頭部が務めを果たすために身を乗り出さんばかりにしているように思えたのである。歯ブラシかカミソリが台座に載せてあれば、彫刻としても十分に通用したであろう。美術品としてそれらを見せられれば、私は単

なる物というだけにとどまらない、形態そのものが生命を宿して長きにわたる価値を生み出しうる、何かもつと意義深いものを目にしただろう。トマス・カーライルは、その著書『衣装哲学』の中で、「正しく見れば、どんなに些細さいさいなものでも、無意味なものはない。物はすべて窓のようなものであり、その窓を通して、哲学的な目は無限性そのものを見つめるのである」と書いたのであった。

（訳文は著者による。また編集の都合上、問題文の一部を改めた箇所があります。次章以降も同様）

いかがでしたか？ 一般的な論説文とはちよつとテイストの違う文章で、一見すると何が言いたいのかよくわからない感じがしますよね。これを一体どうまとめればいいのか、その答えの種明かしをする前に、そもそも東大はなぜ要約を重視するのかについて考えてみましょう。

なぜ東大は要約を重視するのか？

実は東大入試では英語だけでなく、国語でも毎年のように要約の問題が出ています。つまり東大入試では、国語と英語で最低でも要約問題が毎年2問はあるということです。さ

らに、2018年の英語ではこの1(A)だけでなく、次の1(B)のパートでも文章全体の要旨を英語でまとめさせる問題が出ていました。なぜ東大はこれほど要約を重視するのでしょうか？

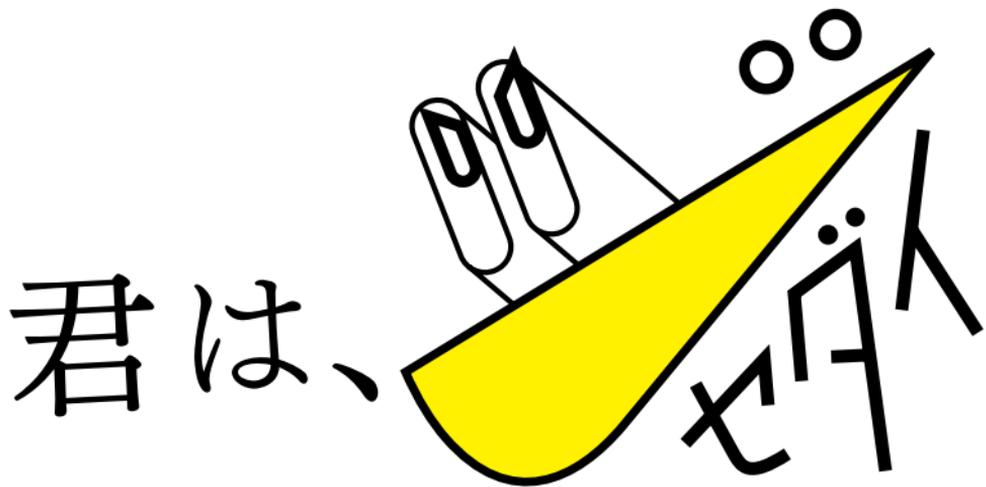
その答えは、受験生の読解力のみならず、表現力まで同時に測るためです。文章の理解度をチェックするだけなら、一般的な長文問題の形式で十分でしょう。しかし、要約の場合は内容を理解するだけでは不十分で、適切な論理構成かつ過不足のない言葉で要点を表現しなければいけません。たとえば、あなたが「最近読んだ本の内容の要点を、1分で話してください」と言われた場面を想像してみてください。内容が理解できていない場合は論外として、仮に理解できていたとしても、上手くまとめきれずに要領を得ない話し方をしていたら「本当にわかっているのかな？」と疑われてしまいますよね。要約もこれと同じで、文章の論理展開が正しくつかめていないと重要な部分がわかりませんし、表現力がなければ冗長なまとめ方しかできません。要約はごまかしがきかないので、受験生の力量が丸裸にされてしまうのです。

東大は「志ある卓越。」をキャッチコピーに、社会を牽引する「知のプロフェッショナル」を育成することを方針として掲げています。そのために学生は入学後、たくさんの専

門書や論文を読みこなす必要があるわけですが、当然ながら一から十まで内容をすべて吸収することは不可能です。そのため、膨大な情報の中から素早く要点をつかみ、それを自分の言葉で表現できるほど知識を使いこなす力が求められるのです。まさにその素質を試されるのが要約というわけですね。

また、要約は社会人になってからも重要なスキルです。相手の話を聞く場合でも、資料やデータを読み解く場合でも、あるいは商談やプレゼンなどで情報を伝える場合でも、簡潔にまとめて理解したり伝えたりする力は欠かせないでしょう。

人が生きていく上では学ぶこと、他者とコミュニケーションを取ることが必須ですから、「要約の力を身につけることは生きることと同じ」と言っても過言ではないかもしれません。そう考えると、東大英語の最初に要約問題があるのもまた、何か意義深いものを感じますね。



何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!